

○宮澤寛子* 南江美子** 鈴木一憲*³ 千葉貴子*⁴(*蔵王町, **福島学院短期大学, *³福島県立医科大学, *⁴桜の聖母短期大学)

目的：近年、若者の食生活が乱れており、伊海らは下宿女子大生の食生活について問題点を指摘している。けれども、寮生の食生活に関する報告は少ない。そこで、本研究においては住居形態別（A：寮、B：親元、C：一人暮らし）特に寮生の食生活調査を中心におこなった。

方法：福島県内栄養士養成課程に通う女子短大生（18～20歳）94名を対象に3日間の菓子類および調理済み食品利用率について食事記録法にて調査を行った。統計解析はSPSSを用い、A群、B群、C群の3群間における差の検定には一元配置分散分析および多重比較（Bonferroniの検定）を行った。

結果：寮は一般に規則正しい食生活ならびに生活習慣であると考えられており、保護者の希望で寮生活を望む学生も少なくない。今回の調査の結果、A群においてレトルト・インスタント食品、クッキーおよびアイスなどの菓子類を高頻度に摂取していることが認められた（ $p=0.05$ ）。寮はキッチン数が少ないという点と、共同使用ということから抵抗感があり手軽なレトルト・インスタント食品や菓子類を主食の代わりに摂取しやすい食品として利用しているものと推察される。高村らの報告によると、調理済み食品の高塩分含量が生活習慣病を引き起こす要因と言われており、一人暮らしより健全な食生活であると思われる寮における食生活がこのような実態であったことは現在の寮の食生活の問題を浮き彫りにした。